

聴覚投映法における形式面と認知面の指標の検討

—対人恐怖心性との関連から—

松川 春樹*

本研究では、聴覚投映法における形式面や認知面の指標の意味合いを明らかにするため、それらの指標が対人恐怖心性とどのように関連するかを探索的に検討した。大学生63名(男性22名、女性41名)を対象に、対人恐怖心性尺度Ⅱ(堀井, 2006)と聴覚投映法を実施した。その結果、聴覚投映法における形式面と認知面の指標の意味合いが記述され、音声刺激よりも非音声刺激において有意な関連が多く見られたことから、非音声刺激に対する反応に形式面と認知面での意味のある差異が表れやすいことが示唆された。また、聴覚投映法独自の指標のすべてにおいて対人恐怖心性に関連していたのは特筆すべき点であった。今後、聴覚投映法における反応の内容面の解釈において、これらの知見が生かされることが期待される。

キーワード：聴覚投映法, 物語作成, 対人恐怖心性

I 問題と目的

聴覚投映法(Auditory Projective Technique; 以下 APT)とは、Skinner (1936)によって考案された verbal summator に始まる投映法の一つである。筆者はこれまで、APTの研究が衰退していった歴史を概観し(熊倉, 1989; Rutherford, 2003)、主題統覚検査(Thematic Apperception Test; 以下 TAT)のような物語作成の手続きを採用して、現代における APT の有用性や可能性について研究を行ってきた(松川, 2007, 2011b, 2012b)。その際、健常者のパーソナリティを5つの因子から幅広く捉える Big Five モデルとの関連を中心に検討してきたが、APT の心理臨床における有用性や可能性を検討する上では、病理に関わるパーソナリティとの比較を行なう必要がある。

その比較対象として、本研究では対人恐怖心性を取り上げる。DSM-5(American Psychiatric Association, 2013 / 2014)によると、対人恐怖症は「社会的交流において、自己の外見や動作が他者に対して不適切または不快であるという思考、感情、または確信によって、対人状況についての不安および回避が特徴である文化症候群である」と定義されている。近年では、この対人恐怖症に類似した青年期における一般的傾向として対人恐怖心性が取り上げられ、数多くの研究がなされてきている。対人恐怖心性は、その傾向が極端でない限りは青年期における健常な自己意識の分化(永

*教育学研究科 博士課程後期

井, 1998)と捉えられ, 対人恐怖症をもう一方の極においたスペクトラムとしても捉えられる。APT が対人恐怖心性とどのように関連するかを検討することは, APT の臨床的活用における可能性を明らかにすることにつながるだろう。

本研究では, APT の指標の中でも形式面と認知面に焦点をあてる。TAT においてもこれらの側面, 特に形式面は重要視され, 太田 (1995) は「語り手を理解するためには, 何が語られているのかということと同様に, いかにも語られているのかという形式的側面に注目することも重要である」と述べている。また, 山本 (1992) は, TAT 物語の特性が精神医学的分類診断を可能にするか, 攻撃的行動のアクティング・アウトを予測するサインを提供しうるか, という視点から研究を概観している。その結果, TAT の内容的特性では不可能であるが, 形式的特性 (検査状況, 図版刺激特性の知覚の仕方, 語り口など) は, 病態水準の大まかな分類を行なう限りにおいて有効であるとしている。しかしその一方で山本 (1992) は, TAT でその形式的特性を量的に測定しようとすることの限界と, ロールシャッハ・テストに類似した分析に近づこうとすることへの懸念から, TAT の持ち味である内容分析を中心に据え, そこに形式的特性を加味する接近方法を提唱している。筆者も山本 (1992) の考えに賛同するが, APT においてこの接近方法をより効果的に行なうためには, 形式面を含む各指標が反応の解釈においてどのような意味を持ち得るのかを明らかにしておく必要があるだろう。

以上から, 本研究では, APT における形式面や認知面の指標の意味合いを明らかにすることを目的とし, それらの指標が対人恐怖心性とどのように関連するかを探索的に検討する。なお, 認知面の指標は聴覚刺激をいかに認知するかに焦点をあてたものであり, 形式面が反応における出力の側面を扱うのに対し, 認知面は入力側の側面を扱う。TAT では認知面の指標は内容面や形式面に含まれることが多い。また, これまでの APT 研究から, 聴覚刺激の一過性の性質により, APT は認知面での解釈を行なう上での手がかりが不足していることも指摘されている (たとえば松川, 2011b)。しかし, 形式面と同様に認知面も, 反応を解釈する上で捉えておく必要のある側面であり, 本研究では指標の精緻化の意味も込めて分析対象に加えることにする。

II 方法

1 質問紙調査

対象者 国立大学の大学生・大学院生 392 名 (男性 189 名, 女性 197 名, 性別不明 6 名, 平均年齢 19.43 歳 ($SD=1.34$)) を対象とした。

質問紙 対人恐怖心性尺度 II (堀井, 2006) を採用した。本尺度は, おびえの心性に基づく現代的な対人恐怖心性を測定する尺度とされ, 5 つの下位尺度 (劣等恐怖, 被害恐怖, 自己視線・醜形恐怖, 孤立・親密恐怖, 加害恐怖) を含む 25 項目から成る。堀井に準じ, 各項目について「非常にあてはまる」～「全然あてはまらない」の 7 件法で回答を求めた。

手続き 大学の講義において調査協力を依頼した。個人情報取り扱いについて説明を行なった上で, 実験への協力を呼びかけ, 協力可能な者には質問紙の所定の場所に名前と連絡先を記入して

もらった。

2 実験

実験参加者 質問紙調査において実験に協力可能と意思表示をした、大学生・大学院生63名(男性22名, 女性41名, 平均年齢19.42歳 ($SD=1.57$))を対象とした。

聴覚刺激 松川(2012a)の16刺激を採用した(表1)。葛藤的な会話場面を中心とする音声刺激8

表1 聴覚刺激の提示順序と内容および長さ

刺激	内 容	長さ(秒)
1	都会の交差点で車や人々が往来する中、ハイヒールや革靴で歩く足音が聴こえてくる。最後にハイヒールで走る足音が近づいてきて、手前で立ち止まる。	30
2	静かな場所で、男性A「例の件、うまく行ったらしいな」、男性B「ああ、少々にこずったがね」、男性A「ふん、さすがだ」、男性B「ありがとう。こっちもほっと一安心だよ」。	11
3	いくぶん静かな場所で、女性「そんなことしちゃいけないって、いつも言ってるでしょ!?', 女の子「だって…」、女性「もうしないって約束する?」、女の子「はい」。	15
4	土砂降りの雨の中、1台の車が通り過ぎ、女性「やっぱズイって…」、男性「お前、今さら何弱気になってんだよ。もうやるしかないって分かってるだろ? さあ、行くぞ!」、女性「あ、ちょっと待ってよ…」。	15
5	公園で子どもたちが遊んでいる中で、男性「何ですてんのか? ちゃんと言わなきゃ分かんないだろ?」、男の子「別にすてん何かないよ…」、男性「言いたいことあるんだったらちゃんと言いなさい?」、男の子「うん…」。	16
6	大勢の客で賑わっているレストランで、女性A「…そっかあ…そりゃ辛かったね…」、女性B「うん…」、<携帯電話の着信音>、女性A「あ、ちょっとごめん」、<携帯電話に出る>、女性A「あ、はいはい、どうしたの? ……え、うっそお!? ……へえーうん…うん、うん分かった! ジャあ明日ねー」、<ブランク>。	34
7	静かな場所で、男性A「お前は何をしたのか分かってるのか!?', 男性B「はい、でも、あれは…」、男性A「言い訳を聞きたいんじゃない! こんなことになって…お前どうするつもりなんだ!?', <ブランク>。	12
8	高架下で、女性A「それよりさ、どこ行こっか?」、女性B「どっか遠いところ…どうせなら海がいいな」。	25
9	静かな場所で、女性A「あ、私こっちだから」、男性「あ、うん、じゃあねー」、女性B「またねー!」、女性A「また!」、<足音>。	14
10	静かな場所で、冷蔵庫の微かな唸りが聴こえる。電気のスイッチを操作する音がして、木製の床を靴で歩く足音と共にゆっくり移動していく。衣擦れの音の後に、ベッドに倒れ込む音が聴こえる。	30
11	走行する電車内で、乗客の小さなざわめきが聴こえる。(開始から約20秒後)女性が2度深いため息をつく。最後に踏み切りの音がかすかに聴こえてくる。	30
12	静かな地下の廊下を歩く2人の足音が近づいてきて止まる。鍵を開け、軋むドアを開閉した後、再び鍵を閉める。	30
13	地響きと荒々しい波の音が聴こえる。砂利道を足を引き摺りながら歩く足音が途中で止まり、動物の羽音や鳴き声が聴こえてくる。	30
14	静かな場所で、衣擦れの音が聴こえる。	30
15	静かな場所で、心拍が聴こえる。	30
16	ひぐらしや鳥の鳴き声と沢音が聴こえる。	30

注1. 内容は筆者が作成時に意図したものであり、実験参加者には必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない

注2. 網掛け部分は音声刺激、それ以外是非音声刺激を示している

注3. 刺激のサンプルを Web で公開している (<http://www.sed.tohoku.ac.jp/lab/clipsy/amb/index.html>)

個と、台詞を含まない環境音や物音を中心とする非音声刺激8個から構成されている。

手続き 実験者と実験参加者は机を挟んで90度の位置に座り、2つのスピーカーを通して聴覚刺激を1つずつ提示した。希望すれば何度でも聴覚刺激を聞けることを伝えた他は、坪内(1996)によるTATの手続きを参考にした。後で詳しく分析するため、参加者の了承を得た上で、ICレコーダーで実験の様子を録音した。

分析方法 参加者の反応について形式面と認知面の指標により分析を行なった(表2)。松川(2011b)で取り上げられた指標を参考に、TATで用いられる指標(鈴木, 1997)に加えてAPT独自の指標も取り入れた。なお、音声刺激と非音声刺激では刺激と反応の性質が異なっているため(松

表2 本研究で用いたAPT指標の内容

側面	指 標	内 容
形式面	反応の拒否・失敗	刺激を聴いて「何も浮かばない」などと物語作成を拒否する、あるいは、物語を作成しようとするが記述水準の反応しかできなかつたり、混乱して筋の通った物語を作れなかつたりしたときに「ある」に評定する。
	初発反応時間	刺激の提示が終わってから、物語を語り始めるまでの時間を秒単位で計測する。
	刺激の追加提示回数	参加者が希望して繰り返し刺激を聴いた回数を数える。
	語りの様式－移入形式	物語の登場人物になりきって、その台詞を交えて物語を展開したときに「ある」に評定する。
	語りの様式－会話形式	物語の複数の登場人物になりきって、その会話を交えて物語を展開したときに「ある」に評定する。
	語りの様式－物語形式	「昔々あるところにAさんという人がいました」のような語り口で反応したときに「ある」に評定する。
	複数の物語作成	1つの刺激に対して、2つ以上の物語を作成、あるいは言及したときに「ある」に評定する。
認知面	前の刺激・物語との関連づけ	それまでに聴いた刺激や、自ら語った物語の「続き」を、別の刺激に対する物語の中で語るなど、関連づけが認められたときに「ある」に評定する。
	微小音要素の取り込み	先行研究において、物語への取り込みが参加者全体で10%に満たなかった音要素を微小音要素とし、その取り込みが認められたときに「ある」に評定する。
	音要素の取り込み	各刺激をいくつかのまとまりに区分したものを音要素とし、物語に取り込んだ個数を数える。
	有音／無音の背景音の取り込み	背景音を物語に取り込んだり、背景音が無音であることを物語に取り込んだりしたときに「ある」に評定する。
	音要素に対する標準的意味づけからのずれ	台詞の意味づけが明らかに変わっていたり、物音の衝撃が極端に弱められたりするなど、ずれが明白であるときに「ある」に評定する。
	<u>登場人物の標準的位置関係からのずれ</u>	2人以上の人物が存在している刺激において、前景にいる2人の位置が遠くに離されたり、後景の人が前景の人と同じ位置にいるとされたりしたときに「ある」に評定する(導入人物を除く)。
	空間の拡大	刺激が設定する空間の他に、参加者が想像した空間を追加したときに「ある」に評定する。
	空間の縮小	刺激が設定する空間内を、建物や乗物などを想像することによって区切ったときに「ある」に評定する。
	触覚情報の性質	肌触りや温感など、触覚に関する言及があったときに、それが肯定的(快)に感じられているか、否定的(不快)に感じられているか、そのバランスを評定する。

注1. 下線部は、TATでもあまり取り上げられることのない、APT独自の指標を示す

注2. 音要素の区分の仕方は暫定的なものであり、今後も精緻化していく必要がある

川, 2011a, 2012a), それぞれ8個分の反応に対する評定を合計したものを分析対象とした。評定値の算出方法は以下のとおりである。「初発反応時間」や「刺激の追加提示回数」, 「音要素の取り込み」は8個の反応における評定値をそのまま合計した。「触覚情報の性質」は「肯定的／どちらでもない／否定的」の3件法で評定したものを「+1 / 0 / -1」に変換し, 8個の反応における評定値を合計した。残ったすべての指標は「ある／ない」の2件法で評定したものを「1 / 0」に変換し, 8個の反応における評定値を合計した。

Ⅲ 結果

対人恐怖心性尺度Ⅱに関しては, 実験参加者63名分について堀井(2006)に準じて全体の合計得点を算出した。平均は72.87, 標準偏差は27.43であった。APTの反応に関しては筆者を含む臨床心理士2名で評定を行ない, 指標ごとに音声刺激8個分, 非音声刺激8個分の評定値を算出した。評定値の平均と標準偏差を表3に示す。なお, 確認のため, 音声刺激と非音声刺激の評定値の差についてMann-WhitneyのU検定により検討したところ, 9個の指標で有意差が認められた。さらに3個の指標では音声刺激あるいは非音声刺激のどちらか一方でのみ出現が認められたため, 音声刺激と非音声刺激で別々に検討するのが妥当と考えられる。対人恐怖心性尺度の得点とAPTの評定値について順位相関係数を算出し, 無相関検定を行なった結果, 以下の有意な相関が認められた(表4)。

まず, 内容面の指標を見ていくと, 「刺激の追加提示回数」は, 音声刺激においても非音声刺激においても, 対人恐怖心性との間に弱い負の相関が見られた(順に, $r = -.25, p < .10$; $r = -.21, p < .10$)。「語りの様式(移入形式)」は, 音声刺激においても非音声刺激においても, 弱い正の相関が見られた(順に, $r = .29, p < .05$; $r = .21, p < .10$)。「複数の物語作成」は, 非音声刺激において, 中程度の負の相関が見られた($r = -.49, p < .001$)。

次に, 認知面の指標を見ていくと, 「音要素の取り込み」は, 非音声刺激において, 弱い正の相関が見られた($r = .35, p < .01$)。「無音の背景音の取り込み」は, 音声刺激において, 弱い正の相関が見られた($r = .33, p < .01$)。「登場人物の標準的位置関係からのずれ」は, 音声刺激においては弱い負の相関が($r = -.28, p < .05$), 非音声刺激においては中程度の正の相関が見られた($r = .42, p < .001$)。「空間の拡大」は, 非音声刺激において弱い負の相関が見られたのに対し($r = -.33, p < .01$), 「空間の縮小」は, 非音声刺激において中程度の正の相関が見られた($r = .54, p < .001$)。「触覚情報の性質」は, 非音声刺激のみで出現し, 中程度の負の相関が見られた($r = -.50, p < .001$)。

「反応の拒否・失敗」や「初発反応時間」, 「微小音要素の取り込み」, 「有音の背景音の取り込み」, 「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」では, 音声刺激においても非音声刺激においても, 有意な相関が得られなかった。

表3 APTにおける評定値の平均±標準偏差および刺激差

APT 指標	音声刺激	非音声刺激	U 検定の結果
<形式面>			
反応の拒否・失敗	—	0.63 ± 1.10	
初発反応時間	100.16 ± 121.50	111.32 ± 71.290	音声 < 非音声 **
刺激の追加提示回数	0.32 ± 0.59	0.56 ± 0.62	音声 < 非音声 *
語りの様式 (移入形式)	4.10 ± 2.11	3.30 ± 2.15	音声 > 非音声 †
複数の物語作成	1.27 ± 1.68	0.75 ± 1.16	音声 > 非音声 *
<認知面>			
微小音要素の取り込み	0.54 ± 0.75	1.41 ± 1.22	音声 < 非音声 ***
音要素の取り込み	36.73 ± 2.050	23.56 ± 4.320	音声 > 非音声 ***
有音の背景音の取り込み	3.68 ± 1.18	4.25 ± 0.84	音声 < 非音声 **
無音の背景音の取り込み	0.32 ± 0.59	1.51 ± 1.19	音声 < 非音声 ***
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	0.63 ± 0.69	0.72 ± 0.54	
登場人物の標準的位置関係からのずれ	0.35 ± 0.59	—	
空間の拡大	0.51 ± 1.35	0.57 ± 1.48	
空間の縮小	0.44 ± 0.59	0.76 ± 0.84	音声 < 非音声 *
触覚情報の性質	—	- 0.92 ± 1.24	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表4 APTの評定値と対人恐怖心性尺度得点の順位相関

APT 指標	音声刺激	非音声刺激
<形式面>		
反応の拒否・失敗	—	-.09
初発反応時間	-.06	-.12
刺激の追加提示回数	-.25 [†]	-.21 [†]
語りの様式 (移入形式)	.29*	.21 [†]
複数の物語作成	-.15	-.49***
<認知面>		
微小音要素の取り込み	-.02	-.09
音要素の取り込み	-.13	.35**
有音の背景音の取り込み	-.16	.02
無音の背景音の取り込み	.33**	.19
音要素に対する標準的意味づけからのずれ	.00	.01
登場人物の標準的位置関係からのずれ	-.28*	—
空間の拡大	-.03	-.33**
空間の縮小	-.09	.54***
触覚情報の性質	—	-.50***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

IV 考察

以下では、対人恐怖心性との間に有意な関連が見られた APT 指標を中心に考察していく。

「刺激の追加提示回数」 音声刺激においても非音声刺激においても、聴覚刺激の追加提示を求め人ほど対人恐怖心性は低い傾向が認められた。本指標は APT 独自のものであり、刺激の細部まで認知できなかった、あるいは刺激に対する聴覚的短期記憶が適切にできなかった場合や、刺激は

聴き取れたが物語が浮かばなかった場合、物語は浮かんだが刺激との一致を確かめたい場合などに該当すると考えられる。また、実験者に追加提示を求めることが、ときに参加者にとって大きなハードルとなる可能性もあり、この場合は追加提示を求めることが能動性に関連するかもしれない。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における社会的外向と中程度の負の関連が報告されており(堀井・小川, 1997), 対人恐怖心性の高い人は積極的に実験者に追加提示を求めない可能性が考えられる。また、対人恐怖心性の高い人は公的自己意識も高いとされていることから(堀井・小川, 1996; 堀井, 2001; 永井, 1998), 参加者にとって刺激の追加提示を求めることが否定的な評価につながると感じられている限りにおいて、対人恐怖心性の高い人は追加提示を求めないようにしていた可能性も考えられる。

「語りの様式(移入形式)」 音声刺激においても非音声刺激においても、登場人物になりきり、その台詞を交えて物語を語ることが多い人ほど対人恐怖心性が高かった。このような語りになされる時、参加者は登場人物に一時的にであれ強く同一化していると考えられ、演技能力や感情生活の活発さや流動性(不安定さ)が反映される(鈴木, 1997)。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における神経質と中程度の正の関連が報告されており(堀井・小川, 1997), 本結果は感情の流動性(不安定さ)の点から了解可能であろう。

「複数の物語作成」 非音声刺激において、複数の物語を作成することが多い人ほど対人恐怖心性は低かった。この反応は、物語を「ひとつ作ってはみたが、緊張が解消しないときに起こる(太田, 1995)」ものであり、いくつかの可能性の中から1つに絞る思い切りのよさや決断力も関連する(鈴木, 1997)。また、1つの刺激に対して複数の物語を少しずつ語るとき、参加者の物語に対する自我関与の度合いは薄まり、参加者と物語の心的距離が大きくなることもあり得る。これに対して、対人恐怖心性は、自分の考えや想像を他者に呈示することを躊躇う傾向があると考えられ、複数の物語の可能性に言及することで、1つの物語への自我関与を低めようとした可能性がある。なお、非音声刺激においてのみ有意な関連が得られたのは、音声刺激は比較的明確で物語作成もある程度方向づけられるのに対し、非音声刺激は漠然としており(松川, 2011a), 参加者にとってはより物語作成に対する自我関与の度合いが強く感じられ、本結果のような特徴として表れた可能性が考えられる。

「音要素の取り込み」 非音声刺激において、音の要素を多く物語に取り込む人ほど対人恐怖心性は高かった。本指標には、情報の取りこぼしを少なくしようとする意味合いから、情報処理における繊細さや警戒の強さが反映されると考えられる。これに対して、対人恐怖心性の高い人も警戒が強いと推測され、この警戒の視点から本結果は了解可能であろう。なお、非音声刺激においてのみ有意な関連が見られたのは、音声刺激では台詞が中心になっており音要素の取り込みの選択幅が小さいのに対し、非音声刺激においては選択幅が大きく、差異が表れやすかった可能性が考えられる。

「無音の背景音の取り込み」 音声刺激において、無音の背景音を多く物語に取り込む人ほど対人恐怖心性は高かった。本指標は、音のないところにあえて反応する意味で、ロールシャッハ・テストにおける空白反応にも類似し、反発や猜疑心などに関連する側面と、無音であることを心地よく

感じる場合には静けさや孤独への親和性などを反映する側面があると考えられる。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における攻撃性との関連は見られず、社会的外向と中程度の負の関連が見られたことが報告されており (堀井・小川, 1997)、静けさや孤独への親和性からの解釈が当てはまる可能性がある。なお、音声刺激においてのみ有意な関連が見られたのは、音声刺激では台詞や人物つまり前景と、場についての情報つまり後景がより明確に聞き分けられるのに対し、非音声刺激ではその境界が曖昧であるためと推測される。非音声刺激では、前景と後景が逆転したり、刺激外の人物を物語に登場させることにより前景が増えることもある。非音声刺激における本指標の意味合いに関しては、今後、詳細に検討する余地がある。

「登場人物の標準的位置関係からのずれ」 音声刺激において、刺激中の人物の位置関係を独特な配置にする人ほど対人恐怖心性は低かった。このような反応は音声刺激のみに現れ、たとえば刺激中の会話場面を電話での会話と捉え、一方の人物は実際は異なる場所にいるなどとされるときに評定され、対人関係の間接化や対人葛藤からの回避が推測される。これに対して、対人恐怖心性の高い人も対人葛藤を回避する傾向があると考えられ、一致しない結果が得られた。本指標の意味合いについては、今後検討の余地がある。

「空間の拡大」「空間の縮小」 両者とも非音声刺激において有意な関連が見られた。聴覚刺激が設定する空間とは別の空間を想像し物語を展開させる人ほど対人恐怖心性は低く、刺激が設定する空間内に建物や乗物などを設定して空間を区切る人ほど対人恐怖心性は高かった。「空間の拡大」は別の空間を産み出す創造性や、刺激からの回避、独断的傾向なども反映されると考えられる。これに対して、対人恐怖心性は Y-G 性格検査における支配性や社会的外向と中程度の負の関連が見出されており (堀井・小川, 1997)、対人恐怖心性の高い人は、本指標に該当するような積極的でやや独断的ともいえる反応を示さなかったと考えられる。他方、「空間の縮小」は、外界に対する壁を作り出すこととも関連すると考えられ、上述の社会的内向の点からも、対人恐怖心性と重なるだろう。なお、非音声刺激においてのみ有意な関連が認められたのは、非音声刺激においては参加者が反応を産出する際の聴空間の処理にかかる比重が大きいものに対し、音声刺激においては、刺激中の台詞や対人葛藤の処理にかかる比重が大きいことが影響を及ぼしている可能性がある。

「触覚情報の性質」 非音声刺激のみで出現し、対人恐怖心性の高い人ほど、触覚に関する描写が否定的であった。本指標の評定値は、触覚に関する描写が不快感や冷たさなど否定的特徴を備えている場合に低くなり、逆に、心地よさや温かさなど肯定的特徴を備えていれば高くなる。ロールシャッハ・テストにおける材質反応のように、他者と触れ合うような親密な関係性に対する感覚を反映することを仮定した、APT 独自の指標である。これに対して、対人恐怖心性も対人関係における不安に関連するため、両者の間に負の関連を認めた本結果は了解可能であろう。

「反応の拒否・失敗」や「初発反応時間」、「微小音要素の取り込み」、「有音の背景音の取り込み」、「音要素に対する標準的意味づけからのずれ」では、音声刺激においても非音声刺激においても、有意な相関が得られなかった。これらの指標は対人恐怖心性とは無関連であると考えられるが、特に「反応の拒否・失敗」に関しては出現数が低いため、今後、データ数を増やしてさらに検討する余地があ

る。

V まとめと今後の課題

対人恐怖心性との関連から、APTにおける形式面や認知面の指標の意味合いについて考察してきた。音声刺激よりも非音声刺激においてAPTと対人恐怖心性の関連が多く見られたことから、非音声刺激に対する反応に形式面と認知面での意味のある差異が表れやすいことが示唆された。また、APT独自の指標である「刺激の追加提示回数」「登場人物の標準的位置関係からのずれ」「空間の拡大／縮小」「触覚情報の性質」のすべてにおいて対人恐怖心性と関連していたのは特筆すべき点であろう。今後、APT反応の内容面の解釈において、これらの知見が生かされることを期待する。

今後の課題としては、対人恐怖心性尺度Ⅱにおける下位尺度も含めた、より詳細な検討を行なう必要がある。また、対人恐怖心性には性差や学年差が指摘されているため(堀井, 2012)、今後、データ数を増やしてこの点についても検討する必要があるだろう。さらに、対人恐怖心性以外の病理に関わるパーソナリティとの関連も検討していくことで、本研究の知見をより明確にする必要がある。そうした研究の積み重ねの結果、APTの反応に対する内容面の解釈をより豊かで適切なものにしていくことができるだろう。

【謝辞】

本研究を進めるにあたりご指導を賜りました東北大学の安保英勇先生、研究にご協力いただきました臨床心理士の齊藤英俊さんに厚くお礼申し上げます。最後に本研究にご協力いただいた皆様に心から感謝致します。

【文献】

- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 5th ed. 高橋三郎・大野裕(監訳)(2014). DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 堀井俊章・小川捷之(1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之(1997). 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 堀井俊章(2001). 青年期における自己意識と対人恐怖心性との関係 山形大学紀要(教育科学), 12, 85-100.
- 堀井俊章(2006). 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発——対人関係におけるおびえの心性を測定する試み 学生相談研究, 26, 221-232.
- 堀井俊章(2012). 大学生における古典的対人恐怖心性の発達の变化 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ教育科学, 14, 63-70.
- 太田宣子(1995). TAT 池田豊應(編) 臨床投映法入門 ナカニシヤ出版, pp.72-89.
- 熊倉敬子(1989). 音の投影法の研究 慶応義塾大学大学院社会科学研究科紀要, 30, 21-28.
- 松川春樹(2007). 聴覚投映法の研究——聴覚刺激の性質とパーソナリティ特性に着目して 平成18年度東北大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)
- 松川春樹(2011a). 聴覚投映法の刺激の特徴について 臨床心理相談室紀要, 9, 33-54.

聴覚投映法における形式面と認知面の指標の検討

- 松川春樹 (2011b). 聴覚投映法における諸指標とパーソナリティの関連——有意味音声の聴覚刺激を用いて 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59, 123-146.
- 松川春樹 (2012a). 聴覚投映法における反応の特徴について 臨床心理相談室紀要, 10, 38-64.
- 松川春樹 (2012b). 聴覚投映法の反応に関する一考察——内向・情緒不安定タイプ者の場合 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60, 257-281.
- 永井徹 (1998). 対人不安における心理的・認知的アセスメント 季刊精神科診断学, 9, 479-488.
- Rutherford, A. (2003). B.F. Skinner and the Auditory Inkblot: The Rise and Fall of the Verbal Summator as a Projective Technique. *History of Psychology*, 6, 362-378.
- Skinner, B. F. (1936). The verbal summator and a method for the study of latent speech. *Journal of Psychology*, 2, 71-107.
- 鈴木睦夫 (1997). TATの世界——物語分析の実際 誠信書房
- 坪内順子 (1996). TAT アナリシス——生きた人格診断 垣内出版
- 山本和郎 (1992). 心理検査 TAT かかわり分析——ゆたかな人間理解の方法 東京大学出版会

Examination of Indexes of Form and Cognition in Auditory Projective Technique:

Focus on Anthropophobic Tendency

Haruki MATSUKAWA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The present study examined meanings of indexes of form and cognition in Auditory Projective Technique (APT), by relations between these Indexes and anthropophobic tendency in a non-clinical adolescent population. 63 participants (22 male, 41 female) completed a questionnaire measuring anthropophobic tendency, and were asked to make stories associated with each auditory stimulus. As a result, meanings of each Index of form and cognition in APT were described. It was suggested that meaningful differences on Indexes of form and cognition was tend to appear in stimulus without voice rather than in stimulus with voice. In addition, it was a notable point that all of APT original indexes were related to anthropophobic tendency. It is expected that APT responses are interpreted more appropriately based on these knowledge in future.

Key words : auditory projective technique, story-making, anthropophobic tendency

